

平成 29 年度入学式告辞

新入生の皆さん、新入生の保護者の皆さん始め関係者の皆さん、今日は本当におめでとうございます。

私たちは今年、大学が開学 50 周年、短大が 49 周年を迎えます。50 年といえば半世紀。半世紀を一つの節目と考えれば、入学する皆さんにとっても、また皆さんをお迎えする私たちにとっても、今日の入学式はとくに感慨深い、記念すべき日でもあるように感じられます。しかし、50 年は一つの通過点に過ぎません。札幌大学が大学たらんとする限り、私たちには、100 年、150 年、200 年を目指して進化し続けなければならない義務があります。新入生の皆さんには、記念すべき 2017 年、あるいは 2018 年が、新たな挑戦開始の年でもあることを胸に、自分のためにはもちろん次世代のためにも、さらなる伝統を積み重ねていくてくれることを期待して止みません。

私たちが皆さんに望むのは、誤解を恐れず端的に言い切ってしまうと、「大人へと成熟すること」、「成熟した大人であり続けること」、の一事に尽きるでしょう。人間は年齢を重ねるだけで、「大人」へと成熟するわけではありません。選挙権や飲酒する権利が、自動的に「大人への成熟」を保証してくれるわけでもありません。「大人」とは、自分が社会というジグソーパズルにおける、かけがえのないワンピースであることを体得した人間のことです。人間誰も自分の幸福と快楽を願い、その実現を欲する権利を持っていますが、「大人」とは自らの権利の行使が、隣人の、あるいは社会の利害と衝突する場合には、自らの権利の行使を自制し、考え直せる人間のことです。何事も腑に落ちるまで吟味できる人間、隣人や社会に役立つことを、自分の利害など考慮する暇もなく、さりげなく実行しないではいられない人間、誰が捨てたか分からないゴミを無意識に片づけてしまえる人間、のことです。

私たちが切望するのは、皆さんが「大人へと成熟」し、「大人」として社会へ巣立って行ってくれることです。大学で学ぶ以上、専門的な知識の修得も大事でしょう。札幌大学には 13 の専攻があり、そこでは経済や経営、法律、文化等々、様々な専門的な知識を吸収できます。また女子短期大学部では、ビジネス関連の専門知識を修得することができます。そうした専門的知見は、皆さんの未来において、大きな武器となりうることでしょう。しかし専門的な知見が、自分の利害のためにだけ活用されるとしたら、どうでしょうか。経済や経営の知識が、バーチャルなマネーゲームに、法律の知識が脱法的蓄財行為に生かされるだけだとしたら、またすぐれた医学的知見がドーピングによる競技力の安易な嵩上げに使われるのだとしたら、それは悲しむべきことではないでしょうか。私たちが何よりも皆さんに望むのは、専門的知見の優劣を云々する前に「大人へと成熟」すること、自分の欲望に忠実でありながらも、社会の平和と安全を優先させしめる人間に育ってくれることなのです。

そうした大人を育てるための教育は古来、「リベラル・アーツ」と呼ばれてきました。それは最初、言語を中心に人間や社会のあり方を追究する 3 科目、すなわち文法、修辞学、論理学、それに数学を中心に自然

界の法則を明らかにしようとする4科目、すなわち算術、幾何学、天文学、音楽で構成されていました。「リベラル・アーツ」と大学の関係は、ヨーロッパに大学が出現した12世紀に始まります。7つの科目は、時代の変遷に合わせて質量ともに変化しますが、その根本理念は現在に至るまで、連綿と受け継がれています。中でもその根本理念にもっとも忠実なのは、アメリカの「アイビー・リーグ」と呼ばれる8大学です。最古のハーバード、イエール、プリンストンなどこれら8大学では、4年間「リベラル・アーツ」だけが教育されます。全人的な人間教育こそが換言すれば、「成熟した大人」の育成こそが最重要事項であり、専門家としての訓練は次の段階、つまり大学院の使命である、との信念に基づいています。

第二次世界大戦後、日本の大学制度はアメリカを手本としてきましたが、この点だけはおろそかにされてきました。戦後の日本はおそらく、経済的な復興を最優先させるあまり、全人的な人間教育よりも専門的な技術教育に、力を注がざるを得なかったからでしょう。しかし私たちは、70年間なおざりにされてきた全人的な人間教育が、今こそ見直されるべきではないか、と考えています。「人は城、人は石垣、人は堀、情は味方、仇は敵」という武田信玄の言葉は、けだし名言ではないでしょうか。皆さんには、専門的な知識の修得もさることながら、あらゆる分野に目を向け、「大人」へと成熟するとはどういうことか、「成熟した大人」となるためには何が必要なのかをいつでも自問し、その回答を模索し続けてほしいと思います。札幌大学の「レイター・マッチング」、「主専攻・副専攻」、「アクション・プログラム」といった制度は、そのためにこそあるといっても過言ではありません。

さて、ここで皆さんに、「大人」へと成熟し、人生を受動的ではなく、能動的に生きるために、4つの言葉を贈りたいと思います。「自覚と志」、それに「知識と経験」の4語です。「自覚」とは現在の自分に何ができ、何ができないかを知ることです。「志」とは明日の自分を思い描くということです。「自覚と志」——それは人生を意味づけるための羅針盤とも言えます。

古代ローマ人は大帝国を築き上げ、長期にわたって維持することができました。それは彼らが、「知力ではギリシャ人に劣り、体力ではガリア人やゲルマン人に劣り、技術力ではエトルリア人に劣り、経済力ではカルタゴ人に劣る」と自覚したうえで、劣っている点をしっかりと見据え、克服すべき方法を編み出しつつ、固有の志を育み、その志を貫徹した結果に他なりません。ちなみに、ジャンプの高梨沙羅さんもスポーツ選手としては、バランス感覚に優れている以外、ほとんど平均値前後の凡庸な体力しか持ち合わせていないのだそうです。

もちろん古代ローマ人も高梨選手も、「自覚と志」だけで頂上を極めることができたわけではありません。「自覚と志」、という羅針盤の指示する道程を踏破し、目的地へ辿り着くためには、さらに必要なものがあります。それが「知識と経験」です。文科系と理科系とを問わない幅広い「知識」、そして理論を実践によって常時加除訂正し、鍛え上げる「経験」は、人生の途上で遭遇する多種多様な分岐点で、たじろぐことなく決断し、選択する自信を与えてくれることでしょう。互いに相補い合う関係の「知識」と「経験」は、障害を

ときに乗り越える方法を、ときに回避する方法を示唆し、また失敗しても捲土重来できる方法を提供してくれることでしょう。斬新で人目を奪うビルの建設が、理論に精通した設計士と熟練大工のコラボの成果であること——そのことをいったい誰に疑うことができるでしょうか。

古代ローマ人も高梨選手も、そうしたことを良く知っていたし、知っている、というより、血肉と化していたし、血肉と化している、といった方が適切かもしれません。彼らはあらゆる分野の知識を貪欲に吸収し、その知識を実地に応用し、失敗と成功を重ねながら急がず慌てず着実に目的地へと近づいて行ったり、近づいて行っているに違いないのです。皆さんもまた、古代ローマ人や高梨選手に倣って、「自覚と志」、「知識と経験」の4語を座右の銘とし、自己実現とは自他双方の満足と存続、発展の異名に他ならないことを忘れず、自他の変化に臆することなく、生の実感に溢れた人生を送っていただければ、それに過ぎる喜びはありません。

「教えるとは希望を語ること、学ぶとは誠実を胸に刻むこと」、「教えるとは希望を語ること、学ぶとは誠実を胸に刻むこと」——これはフランスの詩人アラゴンが書いた美しい詩、『ストラスブール大学の歌』の一節です。私たちの言動がいつでも、皆さんの心に、どんなにささやかではあれ、希望の種を芽吹かせるものでありますように、一方また皆さんは、日々何事であれ、誠実に取り組み、新たな知識と経験を潜り抜けるたびに変貌を遂げ、大人へと成熟していってくれますように——この祈りを私たちと皆さんの、今日という日の約束とすることにいたしましょう。そして私の挨拶も、この約束をもって締め括ることにいたしましょう。

平成 29 年 4 月 1 日

札幌大学・札幌大学女子短期大学部

学長 鈴木 淳一